



— 山形県最上町 —



のちいさなお話し…。

このの字は、森とともにある最上町の暮らしをイメージしてデザインされました。

森と暮らすと「ホホホ…」とみんなに笑顔がひろがっていく様子…。

のかたちは、木のつみき、丸太の断面など最上町の暮らしの中には森や木が密接に関わっていることを表しています。(graphic designer T.Yukari)

発刊
山形県最上町役場 農林課
TEL : 0233-43-2111
FAX : 0233-43-2345
mail : nourin@mogami.tv

協力
東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科 三浦ゼミ

編集
最上町 地域おこし協力隊 鈴木亜季

※この冊子は、2010年2月に最上町で行われた「森のある暮らし展」のパネルを編集したものである。

ホホホのある暮らし

— 山形県最上町 —



山の資源を生かした環境と経済と文化の持続可能な地域づくり

最上町は森に囲まれた自然豊かな町です。かつて、山は薪や炭を生産するためのエネルギーの供給源でした。最上町で暮らす人々の多くはこうした山仕事で生計を立て、町の重要な産業となっていました。そして日々、薪によって飯を炊き、風呂に入り、囲炉裏を囲むという暮らしは森と深い関わりを持ち、食もエネルギーも自給自足する生活文化を最上町は育んでいました。

この森のエネルギーに取って代わったのが石炭や石油でした。ところが、最近この石油資源にも先が見え始めました。石油や石炭は地球温暖化という問題も引き起こし、地球の限界をも見せつけるようになってきました。そして、山間地域の過疎化は進み、活力も低下してきたのです。限界集落とよばれる地域も出てきました。

もう一度、最上町が森の力でエネルギー自立することはできないでしょうか。最上町に広がる森の力で環境を守り、産業を育て、自立した地域をつくれませんか。森と自然と共生する最上町の暮らしに目を向ければ、きっと夢ではないはずです。

町の概要

〔最上町 - もがみまち -〕

最上町は、山形県の北東、宮城県との県境に位置します。

人口：9,988 人（平成 24 年 1 月現在）

面積：330.27 k m²（町の面積の約 8 割が森林）

位置：北緯 38° 45′ 20″、東経 140° 31′ 15″

町域中央部には小国盆地が開けています。町の大部分は奥羽山脈に属する山岳・丘陵地帯で最北端には標高 1367m の小又山、最南端には 1075m の翁山がそびえています。気候的には寒冷地多雨で、夏季には東風が吹き抜け、冬季は多雪です。四方が峰によってさえぎられているため、かつては「小国一おぐに一」と呼ばれていました。

昭和 29 年に東小国村と西小国村が合併し、最上町が誕生しました。「さいじょう」と書いて「もがみ」と読むこの町は、今改めて「森林」に着目することにより、バイオマスエネルギーを活用した“まちづくり”を推進している町でもあります。

森林資源が豊富な町ですが、その中央部には最上川へと続く小国川とその支流が流れている、水も豊富な町です。これらに沿うように集落が形成されています。

<まちづくり>

最上町では、まちづくりのための 10 の視点を設けています（次ページ参照）。自然、エネルギー、食料、移動、ごみ、建物、政策、産業、住民活動、プロジェクトチームと設けていて、この中から自分にできることを見つけるという手法です。難しく考えずに、自然を大切にしよう、石油の代わりに薪を使ってみよう、地元産のものを食べよう、歩ける距離や自転車で行ける距離は車に乗らないようにしよう、ゴミをなるべく出さない生活をしてみよう…などなど、普段の暮らしの中から見つけられます。

また、すぐに行動に移せなくても、住んでいる家を省エネルギー化することや、新築する家は高断熱・高機密にするなど、住宅の基準を設けることもできます。地域のエネルギーを使うにしても、大量のエネルギー消費があるようではいけません。少しのエネルギーで足りるようにしていかなければ意味がないのです。

最上町のみんなで考えることが大切です。住んでいる人が、住んでいる地域のことを考え、未来を描くことをしなければ、一過性で終わってしまう可能性があります。すぐにあること、長い期間で行っていくことを話し合うことが大切です。

まちづくりのための 10 の視点



1. 自然

過去から未来に続くふるさとの自然や歴史を大切にする。



2. エネルギー（資源）

エネルギーはできるだけ地域の再生可能なものを使い、採り尽くさない。



3. 食料

水や食料は命の根源。地産地消につとめる。



4. 移動

人やもののためのエネルギーを抑える。



5. ごみ

自然界で分解されないものは廃棄しない。



6. 建物

今ある建物を大切にし、省エネルギー化する。

新築する建物は、高断熱・高気密が基本。

エネルギー消費を少なく、C O²排出も抑える。



7. 政策

一過性ではない、続けられる「まちづくり」をする。

最上町の未来をみんなで描いて、政策にする。



8. 産業

みんなで描く最上町の未来のために実践してくれる企業を応援する。



9. 住民活動

続けられる「まちづくり」を暮らしの中に広げる。



10. プロジェクトチーム

みんなで描く未来を実践し、「まちづくり」活動も実践するチーム（団体）を作る。

最上町水脈図



最上町には、最上川へと続く小国川が流れています。その小国川へ繋がる沢は、まるで血管が町全体に張り巡らされているようです。

水は私たち生物には必要不可欠なものです。日本は森林資源、水資源に恵まれています。当たり前の「水」も、昔と比べれば水中の生物が少なくなったなどの意見を聞きます。変わっていないようで変わっている変化があることを、身近なところから気づかなければなりません。

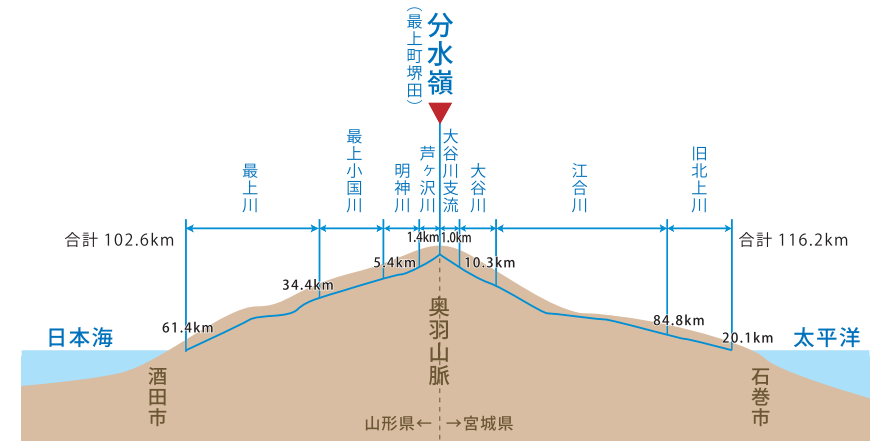
私たちは
水がないと生きていきません。

分水嶺—ぶんすいれい—

堺田にある分水嶺は標高 338m にある。東北地方の背骨とも言える奥羽山脈は、日本海と太平洋とを分ける大分水嶺でもある。降った雨が日本海の水になるか、太平洋の水になるかの境目のことを大分水界というが、それが山脈の尾根にある場合、大分水嶺と呼ぶ。水にとっては重大な岐路なのだが、それが意外と身近なところに、目立たない形でひっそりと存在しているというのは何か示唆的でありロマンを感じる。



駅前広場にある用水路。北から流れてきた水がつかあたりで西と東に分かれている。水の分かれる様が見える分水嶺は全国的にも珍しい。同じ流れも西の水はやがて日本海に、東の水は太平洋に注ぎ込み、大海原でいつの日か出会うのである。



薬師の水（満沢地区 / 醫王堂）

満沢地区のこの神社には 2ヶ所の湧水ポイントがあり、少し上流にはぬるい温泉も湧いている。皮膚病に効能がある水ということで、地域の人が大事にしている。また、下満沢には「長寿の水」があり、この水でお茶やコーヒーをいれると美味しいと評判で、町内各地から水を汲みに訪れる人がいる。



入り口のすぐ近くに一ヶ所



鳥居をくぐって奥の川沿いに一ヶ所



天然林

最上町には、17,986ha の天然林があり、その中には日本最大級といわれる巨樹があり、大切に守り継がれてきています。



大カツラ（権現山）

主幹はコブを浮かべ、地上 2m より 7 本程の幹が竜のように立ち上る。中心に空洞がある。

■幹周：20m ■樹高：40m
■種類：カツラ ■根：22.2m ■樹齢：数百年



大アカマツ（東法田）

菅家の氏神である山神様の神木で、日本一のアカマツの木です。県の天然記念物に指定されている。

■幹周：7.7m ■樹高：22m
■種類：アカマツ ■根：22m ■樹齢：500～600 年

人工林

最上町は 8 割以上が森林で占められており、加えて、民有林の人工林率も県内民有林の平均 39% に比べて 63% と高い割合です。昭和 47 年から昭和 50 年にかけて行われた団地造林 1,240ha もすでに 30 年生以上となっており、間伐が急務となっています。



きれいに間伐され、バイオマスエネルギーとして町内で活用されている。

ナラ枯れの被害

■ナラ枯れとは

「カシノナガキクイムシ」がナラ類に潜入し、その体内で共生関係にあるナラ菌がナラ類の道管細胞を殺し、樹木が水切れ症状を起こして枯死するもの。被害を受ける樹種は、ミズナラ、コナラ、クリなどである。被害を受けた木は、カシノナガキクイムシが潜入する際のもみ屑が出るので、虫の被害を目で確認することができる。

発生から 3 年程度で 7 ～ 8 割が枯死し一段落するが、4 ～ 5 年後には再び残ったものも枯死する。枯死した林の中は繁殖力旺盛なユキツバキなどの下層植生が繁茂し、ナラ林としての更新は困難となる。

■被害の状況

山形県では平成 3 年に旧朝日村で集団的なナラ枯れが発生し、現在では県内全域で被害を受け、庄内地域を除き被害状況は悪化している。また秋田県や宮城県でも被害が確認されており、被害の先端地域は山形県から外へ移動したと考えられる。

町内の被害本数（民有林における調査）

H20 年：16 本 → H21 年：166 本 → H22 年：275 本

H23 年：635 本

■ナラ枯れ被害と里山の手入れ

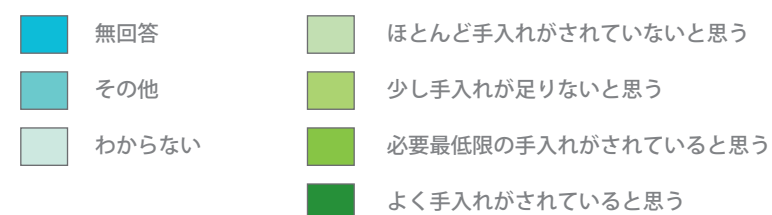
居住地に近い里山にナラ類の林が多いが、薪・炭などへの利用が少なくなり、里山を使いながら若い林に更新させていくことがなく、里山のナラ林はどんどん高齢化している。また、ナラ枯れは老齢木や大径木で多く発生する傾向があるという指摘がある。昔は老齢木になる前に伐採して薪や炭に使い、枯れた木もすぐに伐採して使っていたが、最近ではこのような利用が行われなくなったという社会的な要因もナラ枯れ被害が拡大している原因ではないか、という意見もある。このため、薪・炭への利用のほか、バイオマスとしての利用を進めることで、里山を利用し、健全化していくことも重要である。

アンケート結果

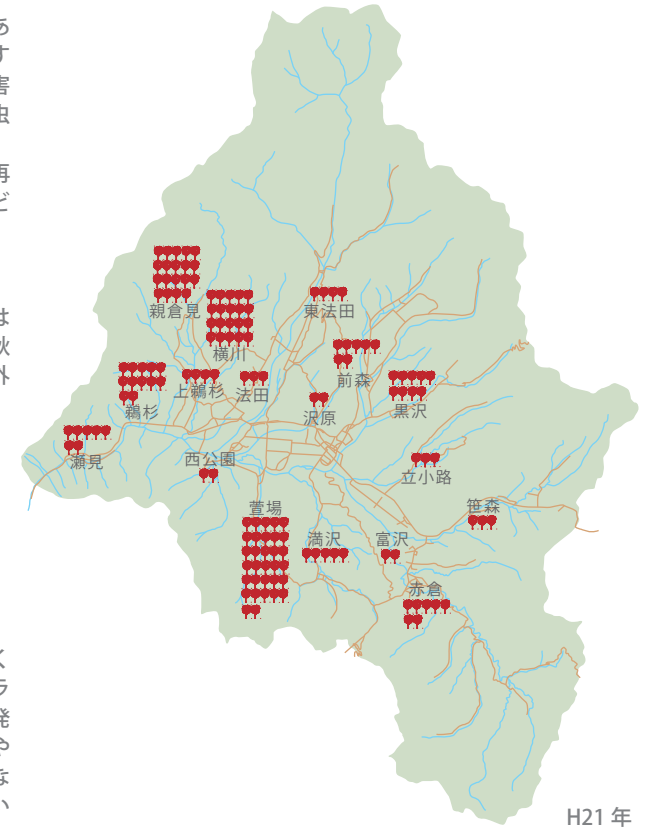
Q. 最上町の杉林や里山の状況をどう思いますか？

手入れがされていない、手入れが足りない、と

58



ナラ枯れ分布図



ナラ枯れの現状

最上町だけでなく最上地域をはじめ、県内全域にも広がっている。



ヤナ茶屋から見た北側の山のナラ枯れ（H21 年 9 月 5 日撮影）



国道 47 号線沿い舟形町付近のナラ枯れ（H21 年 9 月 5 日撮影）

% の最上町民が思っています。

